

# 対話でケア「がん哲学外来」

## 北斗病院が開設準備

提唱者・樋野教授が来院、実践

### 患者に「言葉の処方箋」

北斗病院（帯広市稲田町基線7、鎌田一理事長）は、がん患者が医師らとの対話を通して生や死と向き合う「がん哲学外来」の開設準備を進めている。今年度中に試験的に取り組み、来年度以降、本格実施の意向だ。実現すれば道内の医療機関では初めて。12日には同外来提唱者で順天堂大学医学部の樋野興夫病理・腫瘍学教授が来院し、患者2人に「言葉の処方箋」を提供した。

同外来は、患者ががんを抱えながらも笑顔で人生を生き切る社会を目指し、樋野教授が2008年に始めた取り組み。心理療法的な手法が特徴。現在、全国約30カ所の医療機関やNPO

などが開設している。医師らが患者や家族と1時間程度話し合う中で、生きることの根源的な意味を見詰めているのは金沢大学付属病院だけで、多くはボランティア

的に運営されている。

この日同病院で開かれた同外来では、患者と樋野教授がお茶を飲みながら対話。全身にがんが転移して同病院に入院している自営業男性が、「自分が仕事をできなくなると、周りの人がやってくれるようになった」と話すと、樋野教授は「人に譲れるだけ譲ると、自分がやるべきことがはっきりする」と返答した。

観光関連の仕事をしているというこの男性に対し、樋野教授は医療と観光が融合したビジネスの青写真を描いてみることを提案。「仕事と病気の経験を生かして大きなことを考えるのが使命かもしれない。死んでから30年後に実現すればいいじゃない」と話すと、男性は「今までぼんやり考えていたことがはっきりした。夢が膨らんできてきょうは寝られそうにない」と笑顔で返していた。

樋野教授は「大切なのは他人の必要性に共感すること

とで、これは本来誰にでもできること」とし、「病気にしても気軽に語り合える社会をつくりたい。人口1万5000人当たり1カ所、全国で7000カ所の対話の場ができれば」と構想を語った。

（丹羽恭太）



患者と対話する樋野教授